

第四回中東研究世界大会

——(WOCMES-4) レポート

早稲田大学イスラーム地域研究機構では、人間文化研究機構(NIHU)「地域研究推進事業に係る海外連携・発信の支援事業」の一環として、「第四回中東研究世界大会」(The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES-4) (二〇一四年八月一八―二二日、中東工科大学(トルコ共和国アンカラ)にて開催)に研究者九名を派遣した。同大会のプログラム等の詳細については、同大会ホームページ(<http://www.wocmes2014.org/>)を1覧いただきたい。以下、派遣者による同大会の報告を掲載する。

大会第一日目(八月一八日)

遠藤 春香

ロンドン大学東洋・アフリカ研究院・博士
後期課程／上智大学拠点および
京都大学拠点・研究協力者

大会初日である八月一八日、会場である中東工科大学には午前中から大勢の研究者が集まった。発表はメインの建物に加え、他二棟の建物を使って行われた。この日の発表は、一三時半からと一四時半からの二回に分けて行われた。報告者はまず Explo-
rations in Medieval Islamic Theology と いう 題

のパネルに参加した。ハンバル学派と Salafiyya という スーフィー教団の関連性を考察した発表や、イブン・アラビーによる神認識の方法について論じた発表などがあつたが、中でも出色していたのは、イブン・タイミーヤ思想の専門家である Jon Hoover 氏の発表である。今回の発表で Hoover 氏は、イブン・タイミーヤの空間と方角という概念について考察を加えた。



写真1 大会メイン会場入り口(撮影者:長岡慎介)

例えば、「神はいと高き所にいる」といった神に方角を与えるような擬人神観的記述をイブン・タイミーヤがどう理解していたのかについて、合理主義神学者らの理性に基づいた解釈方法と比較しつつ論じた点が興味深かった。Hoover 氏の発表に対しては聴衆から様々な質問が飛び交い、時間を押しての議論が行われた。

報告者は次に一六時から行われた Theology and Religiosity というパネルに参加した。現代イランの聖者廟参詣や、シーア派における宗教の寛容性について論じた興味深い発表が行われた。中でも報告者の関心を引いたのは、Mahsa Asadollahnejad 氏による Epistemological Theology and Critical Theology についての発表である。彼女は、



写真2 大会メイン会場の受付(撮影者:今松泰)

革命以前のイランには中世以降の照明派哲学の伝統をひく Epistemological Theology と、アリー・シャリーアティーによって提唱された Critical Theology の流れがあったことに着目した。Asadollahnejad 氏によれば、形而上学的傾向が強くしばしば具体的人間についての考察を置き去りにする Epistemological Theology に比べ、Critical Theology は我々一人一人、すなわち「個」のあり方を重んじ、社会改革の主張の強い神学であった。そしてこの Critical Theology の思想こそ、イラン革命を引き起こす素地になったと Asadollahnejad 氏は指摘する。しかしイラン革命以降 Critical Theology は下火になってしまい、抽象的なことばかりを議論する Epistemological Theology が政府によって専ら称揚されている。氏は現在のイランにおける鬱屈した社会的状況を踏まえ、これを打破するために、再び従来の Critical Theology が復興されるべきであることを提言し発表を終えた。その後聴衆からの質問も多くなされ、発表は盛り上がりを見せた。

発表の前には、普段なかなか会うことのできない研究者同士の交流が会場のあちこちで行われていた。報告者も久しぶりに会う研究者と語らい近況を報告するなど、有意義な時間を持つことができた。



写真3 Samir Amin氏による基調講演の会場風景（撮影者：長岡慎介）

大会第二日目（八月一九日）

長岡 慎介

京都大学大学院アジア・アフリカ
地域研究研究科・准教授／
京都大学拠点・研究分担者

会議二日目は、総勢七二のパネルが開かれた。他日と同様、政治・経済・社会・文化に関する多岐にわたる研究報告と討論が行われたが、報告者は自らの関心に近い経済に関する二つのパネルに参加した。第六二セッションでは、一九世紀後半から第一次世界大戦期にいたるまでのオスマン朝経済に関する報告が行われた。報告者はいずれも大学院生であったが、オスマン朝末期の殖産興業の実態や対外債務をめぐる西洋

列強による利害対立の位相について、新しい資料や統計を利用して新説を打ち出そうとする意欲的な報告であった。第八一セッションでは、近年急速に成長しているハラル製品に関する報告が行われた。シンガポールとトルコを対象としたそれぞれの報告では、単にハラル製品の伸張に関する現状分析にとどまらず、そのようなブームを呼び起こしているイスラームと食と経済をめぐる新しい価値観やビジョンについての興味深い考察が行われた。

この日の午後には、サミール・アミーン氏による基調講演「ネオリベのグローバルゼーションと中東への影響」が行われた。報告者は、アミーン氏が最も注目を浴びていた時期よりも後に生まれた世代に属する。そのため、彼および彼を取り巻く議論の様相については、著書および関連文献を辿ることでは知ることができない。しかし、御年八三（一九三一年九月生まれ）を迎えるアミーン氏によるウィットとユーモアに溢れた講演からは、彼が一九六〇～七〇年代になぜ多くの人々を魅了したのかが少しだけ理解できたように思えた。講演内容は、第二次世界大戦後の世界秩序のダイナミズムについて、アミーン氏の十八番である従属理論に即して概観するものであった。ただ、講演タイトルからおそらく多くの聴衆が期待していたであろう現在のネオリベリズムに対するアミーン節は、米ソ冷戦期に対する舌鋒鋭いそれと比べて、いささか精彩を欠いている印象を受けた。質疑応答でも、その点に対する聴衆からのコ

メント（と突っ込み）が相次いだ。が、このことは、現在の世界秩序を理解するための新たなパラダイムの（消極的な？）必要性和それが未だ不在であることを強く私たちに喚起するものであったと言えよう。

大会第三日目（八月二〇日）

村田 久

環太平洋大学次世代教育学部・准教授／
早稲田大学拠点・研究協力者

本研究大会では、全体では三九四のセッションが設定され、第三日は一二七から二三一までのセッションが行われた。高名な研究者のみならず、多くの若手研究者が集まり、発表や議論を行う中東地域のダイナミックな変化を感じることもできる、闊達な印象を受けた大会であった。連日多岐の分野・領域に渡る多くの発表やパネルがあり、私自身は中東研究の専門家ではないが、多くの刺激や経験の習得に大きな意義があった。

筆者は第四日に移民適応についての発表予定があり、第三日目は移民に関連するセッションを中心に聴講した。近年の移民研究で取り上げられることの多いディアスポラ（Diaspora）という概念を通じた議論に興味を引かれた。ディアスポラは民族、マイノリティ、移住者を同郷集団で定義づけるのではなく、ホスト国との緊張関係のプロセスとして捉えうることでできると感じた。ディアスポラはエスニック・マイノリティの事例分析に導入された概念である

が、今後は湾岸諸国へのイラン人やドイツへのトルコからの出稼ぎのようにマジョリティ事例の課題にも拡大して適応されるのではないであろうか。

さて、移民関係のパネルでは、総じて彼ら自身のアイデンティティに関する議論が多かったものの、移民を政策的、法律的に捉えた報告も多数あった。トルコにおける難民の取り扱いやそれに伴う国内合意形成、EUとの相互関係の構築をめぐる議論が、発表のみならず質疑応答の中で示された。しかしながら、これら移民をめぐる二つの大きな議論がありながらも、各々が接合された形での報告や議論がなされていたかどうかという意味では、若干の不足を感じる点もあった。多様なディシプリンや視角をもつ研究者が集まっているだけに、個別の研究の深化もさることながら、包括的な研究視角を提示する必要性が改めて示される結果となったのではないだろうか。

大会第四日目（八月二二日）

今松 泰

京都大学大学院アジア・アフリカ
地域研究科・客員准教授／
京都大学拠点・研究分担者

広大なキャンパスにも慣れて、離れた会場間を移動する際に周囲を見回す余裕もでてきた大会の四日目。報告者は数多くのセッションの中から、現代トルコの問題に関わる二つのセッション、初期イスラーム史に属する発表が行われたセッション、お

よびスーフィズムの様々な問題を扱ったセッションに参加した。

朝一番のセッション *Changing Identity Politics in Turkey: Role of Islam and Capitalism* は、イスタンブールの対照的な二つの地区——ジハンギルとファアティヒエ——をサンプルとして、そこに住む人々のライフスタイルを比較考察した Necole Merdin 氏の発表、および昨今のトルコにおける経済発展の一翼を担う、「アナトリアの虎」と称される新興企業家層のうち、カイセリのそれを取り上げた Başak Özalp 氏の発表からなるものであった。アプローチは異なるがどちらも「世俗」と「イスラーム」の問題に関わる意識と活動を扱ったものであり、現代トルコにおける重要な問題に直結するという点で大変に興味深かった。

午前二番目のセッション *Aspects of Early and Dynastic Islamic History* では、オスマン朝以前の時代を扱う歴史研究からなる二つの発表を得た。森山央朗氏の発表は、いわゆる「ハディースの徒」と称される人々がハンバル学派だけに限られるものではなく、かつてということも明らかにしたもの。Massimiliano Borroni 氏の発表は Nawruz がアッバース朝の政策と密接に関わって発展したという事実を提示したもので、ともに新しい知見に満ちた実りある発表であった。

午後最初のセッション *The Vicissitudes of Sufi Movement in the Society: Past and the Present* はイスラーム地域研究プロジェクトにおいて上智大学と京都大学が連携して



写真4 セッション風景（撮影者：今松泰）

行っている「スーフィズム・聖者信仰研究会」が組んだセッションである。発表者の遠藤春香氏、高橋圭氏、丸山大介氏、赤堀雅幸氏の各発表は、思想研究、歴史学、人類学の協働からなる成果を大会の参加者に印象づけるものとなった。なお当該セッションでの発表は、今年度刊行される『イスラーム世界研究』に掲載される予定である。

最後のセッション『Refugees in Turkey』はほかの参加者の都合により今井宏平氏のみでの発表となった。当発表ではシリアからトルコへの難民の状況を、ハタイの難民キャンプなどにおける事例に基づいて、詳細に報告したものであった。

報告者はたまたま発表者の少ないセッションに多く参加することになったが、どのセッションでも熱心な聴衆との間で質の高い質疑応答が交わされ、非常に実り多いものとなったことをつけ加えておきたい。

大会第五日目（八月二二日）

東長 靖

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・教授／京都大学拠点・拠点代表

五日間にわたって合計四〇〇近いパネルで千数百人が発表を行った中東研究世界大会も、とうとう最終日を迎えた。あいかわらず快晴で、日向にしていると汗が流れるものの、木陰に入れば涼しい。朝晩はとくに爽やかで、ことに会場となった中東工科大学の自然に恵まれたキャンパスでは涼風が心地よかった。

今日は、朝の九時から一時に二三パネル、一時半から一時半までに二四パネル、一時半から一六時半までに同じく二四パネル、最後の一時半から一七時のパネルはさすがに最終日ということもあって二パネルだけが開催された。最終日にもかかわらず、各パネルには前日に劣らぬ参加者が入って、熱気のもった議論を展開していた。その内から、日本が主体のものを中心に、いくつかを紹介する。

この日の朝一番には、日本とトルコが共同で研究を推進してきた地震関係のパネルが持たれた。トルコのデュズジェで一九九九年に起った地震と、二〇一一年に東北地方で起った地震とを比較する趣旨で、人文社会科学と自然科学の融合の成果が発表された。

続く午前のパネルでは、日仏を中心として九カ国の協力を得て継続しているワクフに関する国際共同研究グループが発表を

行った。日本では東洋文庫を中心として、この共同研究が行われている。イスラーム世界のワクフとヨーロッパの寄進財との比較がメインだが、日本・中国や東南アジアも視野に入れた意欲的なパネルであった。午後のパネルでも、日本からの国際発信の場が見られた。国際問題研究所が中心となつて進めている日本の中東外交に関するパネルがそれである。

これらのパネルに共通しているのは、長年の共同研究の蓄積を発表しているということ、国際会議のためにその場しのぎでなされるような浅薄な研究と違って、聴衆に強く訴えかけるものであった。

ただ、この日に限らず、会議全体に言えることであるが、同時並行のパネルが多すぎるため、せっかく質の高い発表をしているのに、フロアの数が少ない場合がまま見られ、また当日の発表キャンセルも相次ぐなど、今回の運営には改善すべき点があるように思われた。次回二〇一八年の開催国はまだ決まっていないが、唯一の地球規模の中東関係大会なので、さらに実り多いものとなるように祈りたい。

パネル報告

“New Frontier in Islamic
Economics and Finance: Empirical
and Policy Implications”（第三日目）

小杉 泰

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・教授／京都大学拠点・研究分担者

トルコの中東工科大学（アンカラ）で開催された第四回中東研究世界大会（WOCMES）に参加した。大会は五日間の日程で、報告者自身は、二〇一四年八月二〇日にパネル「イスラーム経済・金融の新しいフロンティア―実証的・政策的考察」を組織して、司会を務める機会を得た。イスラーム地域研究のグローバルな側面に着目した分野として、京都大学拠点ではこれまでイスラーム経済に力を入れてきたが、その成果の国際発信の一つである。

二〇一〇年にバルセロナで行われた第三回大会でもパネルを組織したが、今回は内容的にその発展形と言える。これまでダラム大学イスラーム経済・金融研究センターとの協力で研究を推進してきたので、今回も同センター長のメフメット・アシュタイ氏、同センターで博士号を取ったロシア出身のエレーナ・プラトノヴァ氏が英国側から加わり、日本側からは長岡慎介氏、京都大学で博士号を取った川村藍氏が報告を行った。

四本の報告はそれぞれ力作であり、フロアを交えて熱心な討論が行われ、充実した時間を過ごすことができた。イスラーム経済には、伝統の再活性化（長岡報告のザカート・ワクフ論）、イスラーム化された近代経済制度（プラトノヴァ報告の湾岸諸国のイスラーム銀行の社会責任投資、川村報告のイスラーム金融の民事紛争解決制度）、今後の世界経済システムの改革へ向けたありうべきイスラーム経済の貢献（アシュタイ報告の持続的発展へ向けたイス

ラーム金融の意義）などの側面がある。この研究分野は比較的新しく「フロンティア科学」と呼ぶに値するが、それだけに前望性のある研究を続けていくことが大事であろう。今回のパネルではその一端を示すことができたと思うが、参加者との討論を交えて、前望性を持つことの重要性をいっそう強く感じた。

次回の大会の開催地はこれから決まるが、さらにこの続きのパネルを組織したいと思う。今回の大会でもいろいろなパネルを見たが、イスラーム経済に関する報告は、残念ながら私たちのパネルを除くとごくわずかであった。国際イスラーム経済学会には非常に多くの研究者や実務家が集まるので、この世界大会のような多様な研究者の集まる機会に異分野交流をもう少し進めるのが望ましいように思う。

パネル報告

“New Frontier in Islamic Economics and Finance: Empirical and Policy Implications” (第三日目)

メフメット・アシュタイ

ダラム大学・上級講師／
京都大学拠点・海外協力者

WOCMESは、中東地域における政治、社会、宗教に関する研究成果の報告の場として非常に良く知られているが、同地域の経済や金融を取り上げた報告は非常に少ない。その中で、報告者が組織したイスラーム経済・イスラーム金融に関するパネ

ル「イスラーム経済金融論の最前線」は大きな成功を収めた。

本パネルは、NIHUProgram・イスラーム地域研究の第一期の立ち上げ時から続いている英国ダラム大学と京都大学のイスラーム経済・イスラーム金融に関する国際共同研究の一環として組織された。座長として小杉泰（京都大学）、報告メンバーとして、報告者（メフメット・アシュタイ、英国ダラム大学）、長岡慎介（京都大学）、川村藍（京都大学）、エレーナ・プラトノヴァ（英国ダラム大学）の合計五名がパネルに参画した。以下、各報告について簡単に振り返ることにしたい。

報告者（メフメット・アシュタイ）は、イスラーム金融の様々な発展形態を取り上げた。取り上げた四つの形態のうち、インドネシアを代表例とする市民社会型の発展形態は、経済学的に最も望ましい厚生を生みだしているのに対して、マレーシアを代表例とするトップダウン型の発展形態は、負の外部性を生みだすことを論じた。また、トップダウンとボトムアップが絶妙なバランスで組み合わせられるハイブリッド型が、近年、新たに登場してきていることをトルコの事例とともに紹介した。

長岡報告では、イスラーム経済の近年の新たな発展形態として、ワクフの再活性化が取り上げられた。シンガポールの先駆的事例を踏まえながら、現代におけるワクフの社会発展や経済成長における役割について分析が行われた。

川村報告では、イスラーム金融の民事紛

争処理について、ドバイを事例にその特徴が考察された。ここでは、従来の裁判所やADR (裁判外紛争解決手続 Alternative Dispute Resolution) とは異なる新しい形態による紛争処理の先駆的解決方法が登場してきていることが紹介され、その意義や可能性について論じられた。

プラトノヴァ報告では、中東湾岸地域のイスラーム銀行による企業のCSR (企業の社会的責任 Corporate Social Responsibility) が取り上げられた。ここでは、各銀行で公開された情報やデータをもとに、CSRへの取り組みについての実証的評価が行われた。その結果、同地域のイスラーム銀行によるCSRの実践は、必ずしも十分なものとは言えないことが論じられた。

いずれの報告も、最新の研究成果がふんだんに盛り込まれただけでなく、本パネルが共通に掲げたイスラーム経済およびイスラーム金融の近年の発展形態をめぐる議論を相互に補うこととなり、きわめて包括的なパネルとなった。討論についても、聴衆の数こそ少なかったものの、本パネルの核心に迫る非常に濃いやり取りが報告者と聴衆の間で行われた。

パネル報告

“Religious Beliefs and Practices of Muslim Migrants in East and Southeast Asia” (第四日目)

岡井 宏文

早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手／早稲田大学拠点・研究協力者

日本中東学会、国際交流基金のサポートのもと開かれた本セッションは、ムスリム移動者を対象とした国際比較調査 (日本、韓国、タイ、台湾) の調査結果の分析を軸としたものであった。使用されたデータは、早稲田大学アジア社会論研究室が、二〇〇五年から二〇〇六年にかけて関東大都市圏で実施した生活実態調査 (「在日ムスリム調査」)、およびこれと共通の質問項目を用いて二〇一一年から二〇一三年にかけて上記の国々で実施された調査 (早稲田大学アジア・ムスリム研究所の委託による) の結果である。

第一報告 (村田久氏、筆者) では「在日ムスリム調査」を用いた日本の事例が、第二報告 (Lee Hee Soo 氏)、第三報告 (Aree Jampakley 氏) では、それぞれ韓国 (ソウル) とタイ (バンコク) における同調査の結果が扱われた。第一～第三報告は、移動者の生活実態、適応観、信仰生活、宗教実践等に焦点を当てた報告を行った。これら三つの報告は、各国の移動者の生活実態、信仰生活・宗教実践の実態を比較可能な形で共有しつつ、各国個別のテーマについても検討するものであった。個別のテーマの

主なものとしては、第一報告では、移動者のホスト社会への適応モデルの析出と適応状況を分岐させる関連要因の探索が、第二報告では日本の調査結果との比較が、第三報告では、バンコクのムスリムにおける国際移動者と国内移動者の生活実態および宗教実践行動における差異の析出とその関連要因の検討などが行われた。第四報告 (小島宏氏) は、日本・韓国・台湾におけるハラル食品の消費行動のあり方に注目し、消費行動に影響する関連要因を析出することを目的としたものであった。

フロアからは、この分野において、マクロ的に実態を捉える量の調査の少なさが際立つ点、その中での貴重な積み上げであるとの評価が聞かれた。同時に、各国の分析が質問項目間の関連性の検討がメインであったことから、各国の移動者を取り巻く状況 (政治体制、移民政策、移住パターン、思想など) をより広く踏まえたいうでの考察や補足説明を求める声が上がリ、活発なリプライ・質疑応答が行われた。

なお、本セッションで使用された質問紙調査の調査報告書は、ウェブ上で閲覧することが出来る。

「在日ムスリム調査」報告書
(<http://www.inmngs.com/>)。

韓国、タイ、台湾、フィリピン調査報告書
(<http://www.kikou.waseda.ac.jp/ias/research/ams.php>)。



写真5 セッション風景（撮影者：今松泰）

パネル報告

“The Vicissitudes of Sufi Movement in the Society: Past and the Present”（第四日目）

丸山 大介

日本学術振興会・特別研究員（PD）／
上智大学拠点および京都大学拠点・
研究協力者

過去三回の WOCMES でパネルを企画してきたスーフィズム・聖者信仰研究会は、今回、「社会におけるスーフィー運動の変遷―過去、そして現在―」というテーマでパネルを組織した。今回は上記テーマに即した思想研究、歴史学、人類学に基づく事例研究三本に、スーフィズム・聖者崇敬複合の理論的展望を人類学的アプローチ

から論じる発表を加えた計四本の研究発表を準備して大会に臨んだ。

三本の事例発表はとりわけスーフィズム・タリカと社会との相互作用に着目し、それぞれの時代状況や地域の文脈に影響を受ける中で、いかにしてスーフィーが思想を紡いできたか、タリカがいかなる活動を行ってきたのかを明らかにすることを目的としている。

一六世紀オスマン朝期のエジプトで活躍したスーフィー、アブドゥルワッハブ・シャアラニーを取り上げた遠藤春香氏（ロンドン大学）は、神の超越性と内在性をめぐって繰り広げられていた神学論争に対する解決策として、シャアラニーがイブン・アラビーによる神の自己顕現説を援用したと主張した。高橋圭氏（上智大学）は、二〇世紀初頭のエジプトに登場したアレクサンドリア・アズミー同胞団に焦点を当て、改革主義者らによるスーフィズム・タリカ批判に対し、タリカ（アズミー教団）がその内部に政治・社会活動を行う慈善団体を発足させ、組織や活動形態の近代化などのタリカ改革を行ったと論じる。スーダンで二〇一二年以降に顕在化したスーフィーとサラフィーの衝突を扱った丸山（日本学術振興会）は、スーフィーがサラフィーとの衝突によって、本来重んずるべき包括的な倫理観から排他的な論理へと移行していく過程について、カーディリー教団とルカイニー教団の二教団を事例に明らかにした。

最後の報告者である赤堀雅幸氏（上智大

学）は、エジプトとアメリカでのフィールド調査に基づき、スーフィズムと聖者崇敬は本来別個の事象ではあるけれども、スーフィズムの信仰・実践として容易に結びつきうる点を指摘しつつ、両者の丹念な調査によってスーフィズム・聖者崇敬複合論をさらに洗練させていく必要性を論じた。事例研究では主にスーフィズムとタリカが主題として扱われたが、赤堀報告が聖者崇敬を考察対象に含むことで研究対象のバランスが取れたパネルとなった。

これら四本の報告後、思想研究を専門とする東長靖氏（京都大学）と中央アジアのスーフィー文学が専門で、WOCMES 13より本研究会に加わっているマルクトウタン氏（社会科学高等研究院）がそれぞれの報告に対するコメントを行った。思想研究、歴史研究、人類学というそれぞれ異なる分野・手法による研究発表が聴衆の関心を喚起し、活発な議論が繰り広げられた。

全体としてスーフィズムを扱うパネルや口頭発表が少なかった WOCMES 4 において、本パネルは日本のスーフィズム研究の最前線をアピールする良い機会となった。今回のパネルではエジプトとスーダンという地理的にきわめて限られた地域を扱っており、時代的には近現代に偏っているのが、地域や時代を拡張させた形でさらに議論を深めていくことが望まれる。